

棚尾地区まちづくり事業

平成 25 年 3 月 21 日（木）19 時～

棚尾公民館 3 階

第 2 1 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

平岩種治郎, 小学校校舎、棚尾神社、味淋造りなど

忠魂碑は戦後、一時地中に埋められたことがあった。

2 テーマ 4 0 「源氏の地名と長田氏」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 月 3 日（水）史跡めぐり 1 0 時八柱神社集合 「棚尾南部地区をめぐる」

コース：棚尾神社、若宮社跡、若宮公園、雨池ポンプ場（場内見学）、雨池公園

4 次回日程

第 2 2 回 4 月 2 4 日（水）午後 7 時から

「杉浦宗京の土風炉（どぶろ）」

第 2 3 回 5 月 2 2 日（水）午後 7 時から

「琴平社」「光照寺弁天池」

「源氏の地名と長田氏」

1 要旨

棚尾に永年伝わる古文書によると、源氏の地名は、平安時代の末期源平の争いにより、平家の武将であった長田氏が知多郡美浜町の野間から、この地へ逃れ隠れ住んだ。やがて、源氏の世になりここを源氏と称するようになったと云う。

この伝承とは別に、鎌倉時代初め、源氏の武将熊谷若狭守直氏（なおうじ）が地頭として棚尾に住んだ時、高台であったこの辺りを源氏山と称したため、源氏という地名が付けられたという説もある。

その後、長田氏は大浜熊野神社や八柱神社の神官を永年に亘って務めるなど、この地域の有力な一族となった。

2 参考文献

- (1) 本村沿革記録 明治32年書之 棚尾村役場
- (2) 棚尾町古文書 昭和23年2月調 棚尾町役場 棚尾町名勝古跡調査会
- (3) 大浜霜山長田家保存 棚尾町関係古文書 棚尾町役場
- (4) 碧南市史料第47集 八柱神社縁起
- (5) 「八柱神社と棚尾の歴史」平成21年度文化財展解説書
- (6) 碧南市立南中学校「私たちの郷土研究」昭和38年12月 村瀬正章
「源氏の地名について」
- (7) 「平氏長田家大河のごとく」 著者長田白赤（なおあか）
発行：長田隆之 平成14年10月
- (8) 「碧南風土記抄」碧南市文化財集第9集

3 長田姓

最初に長田姓について見てみる。明治29年（1896）の棚尾小学校寄付者名簿による棚尾の苗字分類は以下のとおりで、全世帯数1,054名の内、長田姓は34名を占め、源氏町に多いのが特徴である。

1位	杉浦	132名	11位	井上	26名
2位	斎藤	109名	12位	小澤	22名
3位	小笠原	104名	〃	古久根	22名
4位	石川	90名	14位	清水	20名
5位	生田	80名	〃	長崎	20名
6位	榊原	69名	16位	鳥居	18名
7位	永坂	64名	〃	永井	18名
8位	長田	34名	18位	三島	16名
9位	金原	29名	19位	名倉	15名
〃	鈴木	29名			

(以下) 池田、黒田、辻……各9名

澤田、多田……各6名

大竹、岡本、加藤、平岩……各4名

磯貝、酒井、藤井、山田……各3名

伊藤、太田、神谷、亀島、樹神、小島、小林、近藤、芝田、角谷
竹内、成瀬、三浦……各2名

浅田、荒川、安藤、石河、石原、稲垣、井浪、上野、榎本、岡田、
小川、槽、小野木、梶川、片山、河内、川口、川出、國松、小浦、
小高、小島、賢木原、坂部、佐野、杉邨、須田、十河、高木、高橋、
竹本、鶴岡、中野、中根、新實、野村、服部、坂野、深井、深見、
村松、柳瀬、山口、米津……各1名

4 「碧南風土記抄」から抜粋

長田親致古屋敷

長田氏は、代々知多郡野間の内海に住む豪族であった。源義朝が平治の乱に破れ、平氏に追われ、郎党と共に尾張へ逃れて、内海荘司忠致(ただむね)の家に寄る。忠致とその子景致(かげむね)は平氏に通じ、義朝を殺そうと兄親致(ちかむね)に相談した。親致はその不義を説いたが、聞き入れず、ついに忠致は義朝を浴室に案内して家来に殺させた(野間の変)。源平の争いが繰り広げられる中で、親致は自分の身が危うい様子であったので、夜ひそかに漁船に乗って逃げ、大濱郷棚尾に移り住んだ。これは親致の子の乳母

初音が棚尾の生まれであり、その縁故により潜居したという。親致の子仙千代は白正ともいい、長田政俊を名乗り、大浜太郎といった。源氏の勢いが盛んであったので、源氏の浪人として、蟄居していた。これからこの地を源氏と言う様になったと伝える。以下省略。

参考写真 野間大坊の源義朝廟（木刀型のお札が奉納されている）



5 明治32年書之「本村沿革記録」から長田氏関係部分のみ抜粋

長田親致古屋敷

所在 字源氏

現状 宅地

雑項 仁安2年尾張国野間内海ヨリ長田親致三男長田仙千代白正棚尾
出生乳母名ハ初音ノ縁故ニ依リ潜居ス
其後永正年中長田甚助ノ代ニ大濱内小山屋敷ニ転居ス本村長田
居住ハ七代ノ間ナリ

6 昭和23年2月調べ 「棚尾町古文書」棚尾町役場 No.1973-3

別紙ハ明治3年三州碧海郡棚尾村所有取調書其他参考古文書ニ依リ調製セルモノナリ 昭和23年3月10日 棚尾町名勝古跡調査会

(棚尾町沿革)

往昔本州に国造或ハ荘司ヲ置カレタリ 現今碧海郡ト称スル以前ハ第四十八代称徳天皇神護景雲年代迄ハ青海郡ト書キタルモノナリ西加茂郡辺湾ハ海ニシテ棚尾(三州ノ半島ヲ意味セリ)及大浜衣ヶ浦ノ名共ニ古来ノ地形ニ起因スルモノノ如シ

第五十五代文徳天皇仁寿元年末大和国ヨリ当国碧海郡ノ荘司トシテ志貴左衛門藤原周亮当町ニ住居ス

右志貴左衛門荘司タルヲ以テ当町始矢作川西数ヶ村志貴ノ庄ト称ス当時ノ跡形ナキモ屋敷跡ヲ現在志貴屋敷ト称シアリ此ノ当時本町ヲ棚尾大浜ト称シタ後大浜ハ分離セシモノナリ

第八十二代後鳥羽天皇建久年間熊谷若狭守直氏ノ所領トナル領地六百余石当時ノ跡形ナキモ屋敷跡ヲ上屋敷ト称スル

当町字源氏ト称スルハ熊谷若狭守直氏ノ領地タルヲ以テ源氏山ト称シ当時山跡古木アリシモ現在右屋敷跡形ナシ此ノ古事ヲ以テ其ノ称起ル

其ノ後徳川領ニ属シ徳川家康公御伯母花染当町小折戸ニ来住セシコトアリ(現在字畑中)其ノ愛顧セシ井戸ヲ花染ノ井戸ト称セルモ現在跡形ナシ

第百八代後水尾天皇寛永二年当国岡崎城主本田下総守領地トナリ次デ第百十代後光明天皇正保二年酉年ヨリ当国城主井伊井兵部小輔領地トナリ第百十一代後西天皇万治二年亥年ヨリ代官所ハ鈴木八右衛門代官所トナル

第百十四代中御門天皇享保十一年丙午年ヨリ当国額田郡岡崎藩本田中務大輔領地トナリ竹田吉十郎知行所トナル 其ノ後第百十七代後桜町天皇ノ御代明和六年駿河国沼津城主水野出羽守領地トナリ明治元年上総国菊間県管轄トナリ明治四年額田県管轄トナリ明治五年五月第二区棚尾村トナル明治六年愛知県管轄トナル

明治九年十二月本町ノ内字東浦側百五十四戸ヲ裂キテ当郡平七村ニ組込ミ又明治十六年五月中飛地二付本町字西山東山戸数百七十七戸ヲ分離シテ北棚尾村ト称シタ此レ 現在ノ新川町字西山字東山ナリ

明治二十二年地方自治制ニ伴ヒ町村制ヲ布キ大正十三年町施行今日ニ至ル

7 大濱霜山長田家保存 棚尾村関係古文書 棚尾町 No.1973 年代記載なし
(長田親致)

長田親致は長田忠致の兄なり。保元の乱起るや親致は崇徳上皇の御召に応じ白河殿に馳せ参ず。戦利あらず上皇方敗るゝに及び逃れて知多郡野間なる弟忠致の邸に入り、内海に屏居す。平治の乱後、源義朝平家に追はれ東国に逃れんと主従数名にて敗走の途中家臣鎌田政家の勧めに従ひ正家の長田忠致の家に立寄る。忠致並に其子景致平氏に疑を通じ義朝を討って恩賞に預からんと欲し親致に謀る。親致卓識其の不義を説き思い止まらしめんとすれど聴かれず反って己の害されんことを曉知し、ひそかに内海之営宅を出で自ら小舟に棹し三河棚尾の里に來りて蟄居せり。棚尾には親致の三男仙千代丸白正乳母の家ありこの家に入る。

(長田政俊)

長田仙千代丸白正は長田親致の三男にして保元の乱の時、谷従ひ白河殿に赴く、戦敗るゝに及び逃れて三河大浜郷の内棚尾の里に到り乳母の家に投ず。仁安3年(1168)大浜に熊野大権現を勧請し神主となる。元暦元年(1184)源頼朝弟範頼義経をして木曾義仲並びに平氏を討するに及び其の軍に加はって数々の戦功あり。其の功に依って三河国大浜郷の地を賜ふ。屋敷を棚尾の里に構え大浜太郎政俊と称す。人皆常に長田を源氏と言ひ、其の屋敷を源氏屋敷と呼ぶ。今に至るも字名を源氏と称す。

(長田廣正)

長田廣正(初め喜八郎弘光、後に甚右エ門尉)は高望王の裔長田仙千代政俊八世の孫なり(実は醍醐天皇皇子宗良親王四世の孫大橋和泉守定廣四男なり。長田政頼の養子となりて長田氏を継ぐ)

徳川廣忠に囑し采邑壱千三百貫を領し大浜海岸防備の任に当れり屢々織田方と戦へり、大浜は岡崎へ入る要地なるを以て時に上之宮熊野大神の神主河合惣太夫疑を織田氏に通じ尾張の人数を岡崎へ引き入れんと計る廣正之を知り岡崎城主廣忠に注進惣太夫追ひ払いの旨を蒙り直吉、重吉の二子をしてこれを追放せしむ天正18年(1590)

(永井氏)

永井姓は大江もと平氏平政頼四世の孫長田忠致の兄親致より出づ。孫俊致承久の乱北条氏に属し軍功により三河国碧海郡棚尾村百町の地を賜ふ。八世

の孫廣常妻は大江宗秀の娘なり。其の子政廣子なし因って後醍醐天皇の皇子宗良親王四世の孫津島奴野之城主大橋中務少輔定廣の四男廣正を養子となす。孫直勝徳川家康に任へ屢々軍功を顕す。家康より汝の祖は大江氏に由あらば永井と称すべき台命あり依って永井と更む（以下省略）

8 南中学校資料

南中学校郷土クラブの資料「私たちの郷土研究（6）」（昭和38年12月発行 村瀬正章昭和32年4月～40年3月南中勤務）「源氏の地名について」がある。少し長いが、古典を多数参照されるなど、力作なので引用する。

- (1) 碧南市には「源氏」の地名が残っている。明治初年に作られたといわれる。「柵尾村史」には、長田親致古屋敷 所在字源氏 現状宅地 雑項 仁安二年尾張国野間内海、長田仙千代白正柵尾出生の乳母初音の縁故にいり潜居す。その後永正年中長田甚助白重の代に大浜小山屋敷に転居す。本村居住は七代の間なり。

と記している。記事によると、長田親致の屋敷が源氏の地にあったことは分かるが、源氏の地名が生まれた詳細は明らかでない。親致は、野間の長田忠致の兄にあたる。古老の言によると、この地に移り住んだ長田氏が、源氏と称したところから源氏の地名が生まれたという。長田氏は源氏であろうか。

長田親致の流れをくんでこの地に住む長田家の系図には、同家は桓武天皇の後裔とするしてあるという。すると平氏である。「愚管抄」には平忠致とあり、古書にも野間内海の長田氏について、次のように記したものがある。

長田庄屋司は、尾張の野間の内海に平相国より領地を賜りて居りける故、内海の庄司なり。義朝妻縁によりて、庄司を便りとして忍び居りし事、不覚というべし。庄司は高望王の裔にして、その祖勅勘の事によりて尾張に配えらる。子孫内海に残りてありけるなり。

これにも野間の長田家は平氏となっている。大浜の長田親致家は、野間の長田氏の子孫と称しているが、平氏の一統である長田家が、なぜ柵尾に潜居して源氏と称したのであるだろうか。それにはまず長田氏と源義朝との関係から始めなければならない。そこで、野間大御堂寺に所蔵されている「京都六波羅合戦御絵解」「源義朝公御最期の絵解」や「愚管抄」などをもとに考察してみることにした。

(2) 平治の乱に、一方の旗頭として戦って敗れた源義朝は、関東に赴いて、源氏とゆかりの深いその地で再起しようと考え、京都から比叡山の麓を廻って、八瀬大原の方面から逃れようとした。

残った軍勢は、義朝父子の馬を囲んで、たがいに呼び合いながら逃れていた。追撃してくる平家は、先に廻って退却口をふさごうとしたので、これらを蹴散らして逃れていくうちに、始め50騎ほどあった軍勢も、加茂上流の雪ばかりの山里へ着いた時には、義朝父子を含めて14名になっていた。

比叡を越えようと、高野川に沿っていくと、行く手に、一群の僧兵が陣をしいて道を塞いでいた。その数は300人近く、義朝は一戦して切り抜けようとしたが、人々は固く諫め斎藤実盛一騎、僧兵の群れに近づいて貨幣をまき、兜をぬいで投げ、小刀など持ち物を投げ与え、僧兵たちが争って拾おうとしている間を義朝主従、馬に鞭打って駆け抜けた。このような群れを何度も切り抜け、追い散らし、この先船を利用して、東近江の野洲川尻へ、そして守山の宿、山篠原などを経て、美濃国青墓に達した。

青墓から柴船を仕立て、尾張に入ろうとした時には、義朝に従う者は鎌田政家・渋谷金王丸・平賀四郎義宣・鷲津玄光の4人になっていた。義朝は源氏と関係の深い熱田大宮司を頼ろうとしたが、受け入れてもらえず、やむなく鎌田政家の勧めによって、野間の長田氏を頼ることになった。ここに長田氏の名が表れる。

(3) 鎌田政家が、野間の長田氏に頼ることをすすめたのは、長田氏が内海荘の荘司としてこの地方を支配しており、長田氏の娘が鎌田氏の妻であって、両者は舅と婿の関係にあったからであった。長田氏と鎌田氏は、共に遠江の人で、長田の所領は天竜川の西に、鎌田の所領は天竜川の東の鎌田の地であったという。徳富猪一郎の「源頼朝」には、次のように記している。

義朝は野間に赴き、長田忠致に頼り、武具などを整えて、関東に赴かんと心がけたが、その途中で佐渡重成は義朝の身代わりとなって討ち死にし、又平賀四郎は長田の油断ならない者であれば、気を付け給えと諫めたが、否、長田は鎌田の舅なり、此方とも浅からぬ因縁がある。心配に及ばずとて、これを退け、平賀四郎にも暇を遣って、いよいよ鎌田・金王丸を伴い内海に赴く事となった。

内海の海岸は、昔から鶉の多くいた所で美濃方面の鶉飼の鶉はこの地方か

ら供給していたので、この方面との水上交通が開けていたと思われる。

義朝は、海部郡立田村から海路内海に向かい、岡部に上陸した。時に平治2年（1159）12月28日、農家では丁度正月の餅つきの米を蒸していた。空腹を感じた義朝は、ある民家に立ち寄り、おこわを手づかみで食べ、腹を満たしたという。今もこの地方では、正月15日間は餅を食べず、おこわを手づかみで食べる風習を伝え、村人の義朝への深い同情を伝えているという。長田一族は、喜んで迎え厚く持て成した。

ところが、長田忠致は、ふと逆心をおこした。ある時、忠致は、一室にその子景致を招き、ひそかに「我が君、義朝はこれから東国に下られても今は平家の勢いが盛んであるから、どこで殺されるか分からない。我々の手で首を討って、清盛公に奉ったならば、厚い恩賞にあずかるであろう」と申し、景致はこれに同意した。義朝を討つには婿の鎌田政家を討ち取らなくては、この謀の妨げとなるであろうから、まずそれから手を付けようと話はまとまった。

- (4) 翌平治二年正月二日の夜、忠致は一室に鎌田政家を招き、保元の合戦以来の疲れを慰めようと酒をすすめた。政家は婿のすすめであるから、安心して酒を呑み過ぎた。そして座を立てて出るところを妻戸の脇で待ち受けていた景致が切り殺してしまった。

翌正月三日、御湯殿薬師へ参詣の義朝に、忠致は初湯をすすめた。側付きの渋谷金王丸（16歳）は、刀を取って湯殿に控えていたが、しばらくしても浴衣を持参する者がなく、諸事気のきかない有様であったので、金王丸は怒り、長田の屋敷へ浴衣を取りに走った。長田の屋敷は、湯殿から約6丁（650メートル）ある。金王丸が出掛けた隙に窓の下に隠れていた橘七郎が、湯殿の中に飛び込んで裸の義朝に組み付いていった。橘七郎は美濃尾張では無双の大力者であったが、義朝は苦もなくひざの下に押さえつけてしまった。けれども続いて出てきた弥七兵衛・浜田三郎が左右から一度にかかってきたため、さしもの義朝も「せめて木立の一本でもあえば」と歯ぎしりしながら無念の最期をとげた。義朝は、源氏再挙の悲願も空しく、38歳にして非業の最期を遂げてしまった。

首はかねての計画によって、湯殿から二丁程のところにある、小山田相模谷に隠された。飛んで帰った金王丸は、これを知って格闘し、3人を切り伏

せたがもう取り返しの付かぬことであつた。今、野間に義朝の墓を訪れる人達は義朝の無念の思いに心を引かれ、木太刀を手向けて墓前に供えて行くのである。

「愚管抄」には、義朝の最期について、少し変わった書き方をしている。即ちもうかなわないとみた義朝は、鎌田政家に介錯を命じ、政家もまた自害したと次のように記している。

義朝ハ馬ニモノラズ、歩跣（かちはだし）ニテ尾張国マデ落行テ、足モハレ疲レタレバ、郎党鎌田政家カ舅ニテ、内海莊司平忠致トテ、大矢ノ左衛門致経ガ末孫ト云者ノ有ケル家ニウチ頼テ、カカルユカリナレバ、行著タリケル、待悦フ由ニテイミシクイタワリツ、湯沸カシテサントシケルニ、正清事ノ気色ヲカサトリテ、爰（ここ）ニ撃シナンスヨト見テケレバ、叶ヒ候ハシ、アシク候ト云ケレバ、サウナシ皆存タリ、此首討テヨト云ケレバ、正清主ノ首打落シテ、ヤガテ我身自害シテケリ。

金王丸は、長田氏を討とうとして、忠致の屋敷を指して向つた。邪魔者を切り抜け、更に鷲津玄光を呼び、二人で斬りまわつたが、長田父子を討ち取ることは出来なかつた。さては、首を持って、京都へ上つたであろうと、馬屋から馬を引き出し、大音声で「歳積もつて六十三、戦に会うこと十三度、まだ一度も敵に後ろを見せたことはない」と逆馬に乗って駆け出した。平賀四郎義宣は、母の重病のため、国に帰つていった。

- (5) 長田父子は、大いに賞にあずかろうとして、義朝の首を持って京都に上り、それを平清盛にささげた。しかし、清盛は義にそむく長田父子の行為を察して、厚くは賞しなかつた。わずかに忠致を壱岐守に、景致を兵衛尉に任じただけであつた。勿論長田父子はこれを喜ばなかつた。重盛は、不義の者を斬つて後の戒めにしようと言つたので、これを聞いた忠致父子は、密かに逃れて野間に帰つた。

義朝の首は左獄のおうちの木に晒された。後、義朝の恩顧を受けた染物屋の五郎という者がその首を乞ひ左獄の門の傍らに埋めた。やがて平氏の栄華も空しく、源氏によって平氏は滅亡の運命にあつた。平氏を滅ぼした源頼朝はその後野間に赴いて、父義朝のために追福を祈ることになった。頼朝は建久元年（1190）10月3日鎌倉を出発、関東武士を率いて東海道を上つた。18日遠江橋本駅につき、三河を経て尾張に入り、鳴海から尾張の御家人須

細治郎太輔為基を案内者として25日野間に到着、直ちに父の廟所を拝んだ。

平康頼が義朝のために寺を建ててその菩提を弔ったことは、頼朝はすでに聞いていた。頼朝はその恩に報いるため、文治2年(1186)7月、康頼を阿波国麻埴保とした。歳月を経ているので、荒れ果てているものと思い、来てみると、仏殿の荘厳さは目を見張るばかり、読経の声も盛んに聞こえるので、頼朝は自分の予想に反した状況に遭い、ますます康頼の心を感じ入ったという。頼朝はさらに数十の僧侶を呼び集めて仏事を営み、27日には精進潔斎して熱田神宮に奉幣した。「吾妻鏡」には、この時の模様を次のように記している。

建久元年

十月二十五日、尾張国ノ御家人須細治郎大夫為基ヲ以テ案内者トナシ、当国野間ノ莊ニ至リ、故左典厩ノ廟堂ヲ拝ミ給ウ、此ノ墳墓荆棘ニ掩ワレ、へきへい薜蘿ヲ払ワザルカノ由、日来ハ関東ニ於テ遥カニ懷ヲ遺ラシメ給ウノ処、閣ヲ払イ扉ヲ拝シ、莊嚴ノ粧眼ヲ遮ル僧衆坐ヲ構エ、転経ノ声耳ニ満ツルナリ、二品之ヲ怪シミ、疑氷ヲ解ク為ニ濫觴ヲ尋ネラルルノ処、前廷尉康頼入道、国ヲ守ルノ時、水田三十丁ヲ寄附セシメテ以降、一伽藍ヲ建立シ、三菩提ヲ祈リ奉ル(中略)此事康頼入道ノ殊功ヲ謝スル為、兼田一村ヲ賜ウト雖モ、彼ノ任国ハ往年ノ事ナリ、行行定メテ廢絶セシムルカ、潤?ヲ加ウベキノ由、思シ食スノ処、鄭重ノ儀親シク之ヲ覽、弥々禪門ノ懇志ヲ憐ミラル、国別綿衣ニ領、曝布十端之ヲ施シ給ウ。

また「本朝通鑑」には

二十七日頼朝尾張ニ至リ熱田社ニ奉幣ス、而シテ野間ニ到リ、義朝ノ墓前ヲ拝ス、往歳忠宗平氏ノ為ニ棄テラレシ、父子相携エテ鎌倉ニ来リ、且ツ平氏ヲ撃ツノ軍ニ従ウ、頼朝伴リテ厚ク之ヲ遇ス、此ニ忠宗及ビ子景宗ヲ誅シ、以テ墓前ニ徇ウ。

とあり、頼朝が長田父子を召し出して恩賞を与えようと沙汰をし、父子の首をはねて墓前に供えたという説を裏書きしている。「大御堂旧記」には、

長田忠致は、義朝を殺してから平家に仕えようとしたが容れられなかったので、この地に帰った。源頼朝が天下を統一したとき、忠致父子は出頭して罪を願った。頼朝はしばらくこれを許し、土肥実手の家来にして、平家の征伐に手柄があったら、恨みに報いるに徳をもってしようといった。忠致父子

は大いに喜んで、軍に従い、しばしば功があった。後、頼朝は賞を行うという、忠致父子を家に帰らせ、これを捕らえて野間の義朝の墓所の松に磔にした

と記している。「平治物語」には

頼朝、忠致に謂て曰く、約の如く「身の終わり」を宛て行うべしと、忠致乃ち「ながらえて命ばかりは壺岐守、身の終わるをば今は賜る」と詠じ辞せり。

とあるが、ともに吉良上野介の最期のように息詰まる思いがする。長田父子はその後、駿河で戦死したという説もある。徳富猪一郎の「源頼朝」には、

北条時政が甲斐源氏の一党を率いて、駿河国に出かけんとする際、駿河の目代は、曾て義朝を裏切って、彼及び我が婿である鎌田政家を殺したる長田入道忠宗の謀略に依って、これを途中で迎え撃たんとしたが、その謀が甲州源氏の方に漏れ聞こえ、武田太郎信義・次郎忠頼……、何れも富士の北若彦路を躰え、石橋敗戦以来甲斐に逃亡したる加藤太光員・同藤次景廉等を具して、十月十四日は駿河目代と途中にて出合、遂に長田入道忠宗其子景宗の首を梟し、駿河の目代は捕虜となった。

と記している。

歴史の因果は妙である。義朝はその父を殺し、兄弟を殺し、またその子女をさえも殺した源氏の性格を最も露骨に表した人物である。彼は全く主義一本に生き、抜群の武勇者でもあって、猪のように直進する坂東武者の代表的人物であった。従って彼の部下には、彼のために奮戦し、彼のために一命を捨てる者も少なくなかったが、長田父子のために裏切られて横死してしまった。自業自得といわれても、やむを得ないかもしれない。そして又、長田父子も誅される運命になったのである。

(6) 長田氏と碧南との関係は、大浜の長田家の系図に依らなければならない。新井白石の「藩翰譜」には、

長田一族はその後散り散りになったが、小牧長久手の合戦で、徳川家康に従い、池田信輝の首をあげた永井伝八郎直勝は、その子孫だという

と書かれている。長田家の系図によると、

保元の乱の起こった時、親致は上皇方に味方して戦いに破れ、弟の内海の莊司長田忠致のもとに逃れて身を隠していた。義朝暗殺の前、忠致から相談

があり、力を貸してくれるようにとの依頼があった。親致は同意する気がなかったので、身の危険を感じ、夜陰に乗じて漁舟を利用しえ野間を脱出、大浜郷に逃れた。そこが今の源氏の地である

という。

義朝が殺されたのは平治2年(1160)正月、親致が大浜郷棚尾に逃れたのが仁安2年(1167)と系図に記されているというから、これは年代が合わない。親致は野間から直ちに棚尾へ逃れて居着いたのではなく、一旦どこかに身を隠してから、この地に移ったものと考えられる。

この頃は、平氏の全盛時代ではあり、やがて、平氏は滅亡し、源氏の世となる。棚尾に逃れて潜居していた長田氏は、元々は平氏ではあるが、源氏の世になったところから、自らを源氏と称したという。源氏の地名の由来はここにあるというのである。

ここにいろいろ疑問があるので、次に記してみよう。

さきに記した新井白石の「藩翰譜」には、家康から、「長田は源氏の敵だから永井と改めよ」といわれて、改姓したものだというように書かれているが、この永井直勝について、「夏目日記」には、「永井直勝は緒川村の人なり。初め長田伝八郎と称す。後に徳川家康の命により姓を永井と改む」と書かれている。「三河志」には、「永井伝八郎直勝は、初め大浜村の名主であった永井平右衛門の子で、信康に初めて仕えた」と記し、また、「永井直勝は長田半右衛門重元の子である。長田半右衛門は第五十一代平城天皇の三王子阿保親王九代の後胤権中納言匡房卿三代の陸奥守大江広元四代甲斐守永井宗光より十一代の人である」とも記している。直勝の父は永井平右衛門、長田半右衛門と異なった名となっているが、「武家盛衰記」には、長田半右衛門尉とある。「国家異変録」では、平城天皇の後裔大江広元から分かれた永井宗光より十一代目の永井平右衛門の子とあり、「神武創業録」には、大浜村の地主長田半右衛門の子と記している。大浜の長田家の系図では、直勝は親致の血を引き、大浜上の宮社田を食す重吉(喜太郎、後に八右衛門)の子となっている。

ここで、注目すべきことは、「武家盛衰記」に

十一代長田半右衛門尉重元が代に至って、三州大浜村に至り、近辺を切り従えて居住す。この時なお乱世の最中なれば、彼の邑を近郷より掠め取むと

欲す。重元毎度武威を震い、郷民を撫育して終に彼村の庄官を司ると云々。

とあることである。この書によると、平城天皇の後裔である長田半右衛門重元が、初め大浜村に来て、近辺を切り従えて居住し、その子が直勝であると記しているの、長田氏が大浜に来たのは戦国時代ということになる。

長田氏を追ってきて、つい長くなってしまった。ここで改めて長田氏はいつの時代に大浜村へきたのであろうか。長田氏の出自はどのようなものであろうか。野間の長田氏とはどのような関係にあるのだろうか。このような点について考えてみると、諸書異なる記述があつて一定しない。

「日本歴史大辞典」（河出書房新社刊）について「長田忠致」の項をみると、次のように記述されている。

忠宗とも書く。世系粉々として一定しない。一本には平致行の孫、行致の子と伝え、また上総介平高望八代の後胤ともいう。駿河安部郡長田荘司で尾張知多郡内海荘をも兼領した。源義朝の家臣鎌田政家の舅、義朝平治の乱に敗れ、平賀義信、鎌田政家らを従えて美濃に至り、忠致の家に宿る。忠致平氏の命を受け義朝を害して賞を得ようと図り、義朝を浴室に刺し首を持参した。功によって壺岐守に任じられたがこれを不満とし、かつ世の風評もよろしからず、遂に尾張に逃げ帰った。「平治物語」には、その後、彼は源頼朝に降り、木曾義仲の追討や一の谷、屋島の合戦にも従軍したが、戦後、捕らえられ、義朝の墓前で、土磔の刑に処せられたと記されているが、実録にはみえず信じがたい。

9 「平氏長田家大河のごとく」 著者長田白赤（なおあか）からの抜粋

長田白赤氏は長田家後継者の立場から、野間での状況について、別の見方をされて見えるので紹介する。

「寛政重修諸家譜」平氏良兼流 長田の條に

左馬頭義朝、平治の戦に利をうしない、尾張国に逃れ、忠致が許に寄宿せしとき、男、景致と俱に義朝を討て平家の恩賞にあづからむとて、兄、親致にはかるところ、肯ぜざりしかば親致をも併せて殺さむとす。よりにて親致は内海の宅を逃れて、しばらく智多郡に潜居す。……また三河国碧海郡大浜の郷、棚尾村に隠る。

とあります。これも又、話の筋としてはおおよそのところは、良しとしておきましょう。

当家の伝承としては、義朝と正清は年末の31日に到着し、早く東国へ逃れたいが……と云ったらしいが、もう正月だからしばらく泊まって行けと行って、忠致の野間の館で当初は歓待したが長男の景致が内海の出城より帰り「平家の大軍が船で攻めてきた。もう駄目だ、このままでは当家は滅びる。」と言い「義朝を討たねば当家は戦になり、多数に無勢、敗けてしまう。」と強力に主張。忠致は兄の親致（当家に隠れ住んでいた。）に相談したところ親致は「由緒ある人を討つのは良くない、止めておけ」と言ったが、景致が聞かず、「伯父親致をも共に討ち取らんと気色となり止むを得ず逃れ去る。」とあり、ことの次第や動きなど、平家攻め寄せることを伝え聞き「すは合戦かと館の人々の騒動や様子で、鎌田正清が知り、義朝も知る所となり、今は逃れられずとみて自害したもの」とあります。

10 八柱神社と長田氏

- (1) 八柱神社と長田氏は関係が深く、当神社で参詣者用に配布している説明書は次のとおりである。

八 柱 神 社 概 要

鎮座地 碧南市弥生町3丁目140番地

祭神 まさか あかつかつはや ひあめのおしほみのみこと
正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命

あめのほひのみこと
天之穗日命

あまつひこねのいち
天津産根命

いくつひこねのみこと
活津彦根命

くまのくすびのみこと 熊野久須毘命 いじょうあまてらすおおみのかみ
(以上天照大御神の五男子)

たきりびめのみこと
多紀理毘売命

いちきしまひめのみこと
市杵島比売命

たきつひめのみこと

湍津比売命

すさのおのみこと

(以上須佐之男命の三女子)

仁徳天皇（若宮社から移る）

創立 仁寿3年8月21日

由緒沿革

文徳天皇の仁寿3年（853）、志貴荘司志貴左エ門藤原周亮（かねたか）の創立で八王子宮と称した。永暦元年（1160）正月長田荘司平親致の三男仙千代白正が棚尾村に来て神主となり、以来明治維新まで社家となる。

文化9年（1812）永井日向守直進が社号額を奉獻する。明治5年（1872）9月村社に昇格し、社号を八柱神社に改称する。同17年（1884）2月28日に郷社に昇格する。同年3月18日従四位山中信天翁が社号額を奉獻する。同39年（1906）4月神饌幣帛料供進社に指定される。大正3年（1914）8月6日、字上屋敷57番地に鎮座の若宮社の祭神仁徳天皇を合祀する。同10年8月男爵千家尊福書社号額を氏子中より奉納する。昭和23年（1948）9月愛知県神社庁より六級神社の等級を受ける。

例祭日 10月第3日曜日

境内末社 宮比社 祭神 あめのうずめのみこと 天細女命（芸能の神）

(2) 棟札

八柱神社が保管する棟札で江戸時代のものは24枚あるが、その中で長田氏の名前が出てくるものは次の通り17枚あり、長田氏が永年に亘って神主であったことが分る。

ア 元和6年（1620）奉建立御寶殿之守護所

檀那 長田安右衛門白勝

イ 寛永15年（1637）奉建立八王子御寶殿供守護

神主 長田安右衛門白勝

ウ 寛文10年（1670）大八王子社并華表當処守護所 ※華表は鳥居のこと

神主 長田氏也

エ 貞享3年（1686）奉建立八王子・碧海郡・棚尾邑氏子繁島幸祈処

大濱邑神主 長田氏兵部白久

オ 宝永2年（1705）奉修造八王子上葺鳥居

- 神主 長田氏兵部白勝
- カ 享保6年(1721)奉上葺八王子三孛碧海郡棚尾村想氏子
権現神主 長田求馬
- キ 宝暦10年(1760)奉修造八王子御社 ※この棟札は現存しないので、
調査書の写しによる。
- 神主 長田求馬白恒代
- ク 明和元年(1764)奉修造八王子御社葺替総氏子安全守護所
神主 長田主水白晴代
- ケ 天明元年(1781)奉修造八王子御社葺替総氏子息災安全守護所
神主 長田主水白晴代
- コ 寛政4年(1792)奉再建八王子御社総氏子息災安全守護所
神主 長田主水白晴代
- サ 文化8年(1811)奉修造八王子御社葺替総産子息災安全守護所
神主 長田求馬平白賁
- シ 天保3年(1832)奉執行地鎮大行事埴山姫命當境守護攸
長田平白賁
- ス 天保3年(1832)奉執行地鎮大行事軻過突知命當境守護攸
神主 長田平白賁
- セ 天保3年(1832)奉執行地鎮大行事岡象女命當境守護攸
神主 長田平白賁
- ソ 天保3年(1832)奉再建八王子宫惣産子息災安全守護所
神主 長田内蔵介平白賁代
- タ 天保3年(1832)八王子御本社添棟札
神主 長田白賁代
- チ 嘉永6年(1848)奉葺替惣氏子息災安全守護所
神主 長田内土岐丸平白斐

(3) 八柱神社由緒記

碧南市史資料調査室の棚尾村文書の中にNo.1360「八柱神社由緒記」の筆写がある。

記録者は大浜下の宮熊野神社の神主であった長田家の者と思われる。本文は「八柱神社と棚尾の歴史」参照。

1 1 中山神明社の由緒

中山神明社は字源氏から現在地へ遷されたものという。

(1) 神明社の由緒碑は以下のように記している。

当神社ハ、往昔棚尾村字源氏ニ鎮座坐シテ、生田新左衛門ノ崇敬セシ神社ナリシガ、或時赫々タル神霊ノ夢想ニヨリテ、本村ナル字稲野、即チ現在地ヘ一字ヲ建立シ、茲ニ御霊ヲ遷シ奉リ、国土ノ安泰、農工商ノ繁栄、氏子ノ守護ヲ祈請シ奉リタルモノナリ

大正三年多度社祭神天津日子根命ヲ合祀、大正五年神明社祭神天火明命ヲ合祀奉ル

昭和二十年十二月十五日、村社ニ列セラレ、昭和二十二年六月九日愛知県神社庁ヨリ第十二等級ノ神社ニ認証セラル

(2) 棚尾町史資料

神明社参籠殿に関する記 昭和7年壬申10月 棚尾町役場

町長永井治郎平

棚尾町字神明鎮座源氏神明宮遷座の事

ア 昭和7年10月18日棚尾町字神明に鎮座まします源氏神明宮の渡殿新築し終りたり

イ 本殿は其の儘西の方へ約24尺ばかり移し新築の渡殿兼参籠殿の工事は全く了りたり

元の渡殿は幅7尺のものなりしかは御祭りに差支あり且は長き歳月を歴て破れいたみたれば今年新しせんとて其氏子惣代たる長崎重治、斎藤甚四郎、鈴木岩二郎、生田松治郎の4氏中山部民の切なる願いを納れて新築する事とはなりぬ。

ウ 昭和7年9月4日午後9時半頃より本殿と神鎮りまします神霊の遷宮を此に奉る

神官栗田竹治郎病気のため代りて神官石原久治郎雑掌野村金作の二名仕え奉る時に棚尾町長永井治郎平氏子惣代斎藤甚四郎、鈴木岩二郎、生田松治郎の四名及び中山生田國太郎外ら四名仕え奉る

午後10時頃惣ての燈火を滅し祝詞奉賛終炬火の光に御影を照し警いつの声に導かれ恙無く神霊は神楽殿に遷御あらせ終ふ又最も莊重の式の内神官祝詞を上り神饌を進め厳肅に式は終らせたまふ

- エ 本殿に鎮まり座す三柱の神は源氏神明宮、堀切神明宮、多度社なり
- オ 源氏神明宮の御はこは長さ2尺ばかり幅8寸ばかり台は高さ3寸ばかり堀切神明宮の御はこは長1尺3・4寸ばかり幅6寸ばかりなり多度社のはこは長8寸ばかり幅6寸ばかりなりと聞きたり以上三柱の神まします
- カ 源氏神明宮の御はこはこの表に「源氏神明宮」と明記しありと聞く
- キ 当夜は東風微にあり星稀に夜深く沈々として物のけはいなし誠に森巖の極みなりき
- ク 源氏神明宮の沿革に就て
平治の乱に左馬頭源義朝戦に破れ東鎌倉に逃れんと美濃国青墓より河を下り尾張国内海荘野間に館する旧臣莊司長田忠致の方に寄る 忠致其子景致と厚く遇し正月4日湯殿にて義朝を刺殺す
義朝の事頼朝鎌倉に起り天下に令す其臣安達前九郎盛長を熱田宮司方に遣し忠致景致を招き之を捕ふ刑を旧里野間の館に行り
眷属驚き其の財宝を携へ小舟に乗りて景致の長子2歳なるものは乳母の里棚尾に隠る 其の時持来せるものの内源家の重宝「髯切（ひげきり）」と称する短刀あり 天下に聞ゆる名剣なればとて屋敷の隅に小なる祠を造営して之を源氏神明宮と称し後々まで祭りたり
其後当国幡豆郡西の町に（西尾町大字上町實相寺の西及北）館する領主足利義氏の許に此家より乳母として上がりくるものあり 四方山の談に乳母の実家に名剣あり之を尊崇して神と祭りある旨述へたり さういそれ覽したしとの内意に依り之を持来るして披露すれば源家の重宝「髯切」なり 鎌倉に上り委細奏上すれば足利義氏方に保管せよとの命なり 之を居館に置き後西條の城を移し（現今西尾町）城内に御劍八幡宮で祭り今日まで其神霊と尊崇する所なりと聞く
足利義氏公は乳母の実家に神明宮の神霊を下附せられたり初めは当町上屋敷に祭り後に字源氏に移りたり（口碑には長田坂一氏の宅地なりと聞く）弘化3、4年頃まで其の古址に古松数株ありて古の神明宮の跡なりと称す
今中山神明の地に移りたるは今歳を去る313年目なり（昭和7年より起算して）以上源氏神明宮の起源なり

棚尾町字神明鎮座源氏神明正遷宮の事

- ア 昭和7年10月18日夜10時兼て新築中なりし渡殿も落成し本殿の西の方へ移りたれば今日のよき日を撰みて今夜正遷宮の式を行い奉る
- イ 神官栗田竹治郎病気のため神官杉浦文太郎に代り社掌斎藤千代三郎仕え奉る
- ウ 棚尾町長永井治郎平氏子惣代長崎重治、斎藤甚四郎、鈴木岩二郎、生田松太郎等及中山生田一郎、岡本開太郎、生田國太郎、其他5、6名ばかり御供し奉る
- エ 此度の新築渡殿の棟梁は当町堀切大工小澤長十承り、屋根の瓦は当町源氏斎藤昇平承る
- オ 仮の神殿たる神楽殿にて祝詞を奉し、炬火の光と警ひつの声に導かれ本殿に御遷らせたもふ
- 夜深くして四隣鬨（げき）として声なく沈々たる神明の森炬火の光写るは警ひつの声誠に森巖謹肅の極みなりき 以上

昭和8年10月19日朝認之 棚尾町長 永井治郎平

1.2 その他関連事項

(1) 長田川について

安城市から西端の東を流れ下って油が渕へ注ぐ長田川について、上記「平氏長田家大河のごとく」では、長田氏が周辺の新田開発を進める中で、建設した人工の河川であると推測されている。

(2) 家紋

平家の家紋は三つ剣に三つ柏である。長田家の家紋について、一部でお聞きしたところ、同じ家紋であるとのことであった。